

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑩

今回紹介する収蔵品は、級生である河東碧梧桐を通じて正岡子規と知り合い、俳人・高浜虚子の肖像画である。本作品は掛け軸に仕立てられており、画家・中沢弘光が虚子の肖像画を描き、夏目漱石の「吾輩は猫である」を同誌に掲載したことも知られている。また、虚子は俳人としてだけでなく、写生文小説の分野でも高く評価され、1954（昭和29）年、俳

高浜虚子の肖像画

絹地に水彩句を添える

き、虚子自身が句を添えている。

虚子は「存じの方が多い」ように、1874（明治7）年松山市出身の俳人・小説家、本名は清という。同

1954（昭和29）年、俳

人として初めて文化勲章を受章した。

虚子の肖像画を描いた画家・中沢は虚子と同年に東京都に生まれる。曾山（大野）幸彦や黒田清輝に師事し、白馬会の創立に参加するなど、西洋画の草創期を支えた画家である。また、1912（大正元年）には、愛媛県出身の杉浦非水らと光風会を結成する。

さて、本作品の制作年代

二日の主哉」という句で、12月18日に翌年の新年俳句会の放送録音のために詠まれた。正月に紹介するのにぴったりな句である。「笹鳴き」とは冬の季語で、ウグイスの子どもがさえずりの練習をしている様を表し、「二日」とは正月二日を指す。冬から春への移ろいを感じられる句となっている。



虚子翁画像（画・中沢弘光、賛・高浜虚子）＝県歴史文化博物館蔵

絹地に水彩で描かれた虚子の姿は、穏やかで、少しすましたような表情のようにも見える。この肖像画は句が詠まれた1949年以降から、虚子が死去する59（昭和34）年の間に描かれたと考えられるため、75歳以降の姿だろう。なお、中沢は、虚子の喜寿（77歳）の時に油絵の肖像画を描いていることから、本作品もその一環として描かれたものかもしれない。

（主任学芸員・田斐未希子）
〈随時掲載します〉

【紙面編集】清家香奈恵